

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

とある影使いの白雪姫

【作者名】

鬼ポツポ

【あらすじ】

あるところに1人の少女がいた

その子は名門常盤台の学生でLevel5の第6位

謎に包まれた少女の物語が今始まる

とある影使いの白雪姫

ジャッジメント
風紀委員一七七支部

「ねー初春聞いているのー？」

「聞いてますよ。『影女』でしたっけ？第七学区に出るって噂ですよ
ね」

「そうそうー！なんかそれに会っちゃうと自分の影が襲って来るんだっ
て！これは調べない訳にはいかないでしょー！さあ行くよ初春！」

目をキラキラさせながら話す少女の名は佐天涙子
都市伝説が大好きな彼女にとっては無視出来ない話しなのだろう

「えー今からですかー？サボってんのバレたら白井さんに怒られるか
ら嫌ですよー」

あまり気乗りしてない方は初春飾利。佐天涙子とは同級生で風紀
委員一七七支部の1人。

今彼女は友人とお喋りしながらサボり……いや休憩中である。

「もうバレてますわよ初春」

「わわわわわわ、しししし白井さんー！」

突如現れた少女は白井黒子。初春と同じく一七七支部に所属する
風紀委員でありLevel4の大能力者。能力は空間移動《テレポー
ト》

「初春あなた私が仕事してる最中にサボってましたのね。はあくせつかく仕事早く終わってたからたまにはケーキでも奢ってさしあげようかと思ってたのに、また次の機会にしますわ」

「そんなー…もう！佐天さんのせいですよ！」影女』の話しなんかするから！」

「ははは、いやーごめんね初春ー今度私のスカートめくっていいから許してよ」

「なんですかその交換条件は！」

「と」ろで『影女』ってなんですか？」

「ふふふ、よくぞ聞いてくれました白井さん！」影女』ってのは今学園都市で急上昇中の都市伝説ですよ！」

「はあくまた都市伝説ですか？」

友人の佐天涙子が都市伝説ではしゃぐのは毎度の事なので黒子は呆れ眼で呟く

「と」ろがどっこい今回のはいつもと違つんですよ！すでに被害者も出てるみたいだし！…あ、ヤバ」

興奮してる中ジトーっとした目をむけた黒子に気づく

「被害者が出てるってことはその『影女』の正体は能力者に違いありませんの。だから佐天さんは危険ですので首を突っ込まないでくださいまし。ここからは私達風紀委員の管轄ですわ。初春！すぐに『影女』について情報を集めてくださいな」

いつもの都市伝説ならともかく被害者が出てるなら調べない訳にはいかないと初春に指示をだす黒子。

「えーでも…」

「でもじゃありませんの。被害者が出てて犯人もまだ捕まってないって事は高位能力者の

可能性が高いですよ？そんな危険な事に佐天さんが首を突っ込むのを風紀委員としても友人としても見過ごせませんの」

なんとか反論しようとしたが真面目に自分の事を心配してくれる黒子の言葉にしぶしぶ頷く

「じゃあせめて犯人捕まえたら話しだけでも聞かせてね！」

「まあそれ位なら」

—————

常盤台中学。学園都市でも5本の指に入る名門のお嬢様学校。

その図書館の中が多少騒ついている。ちなみに普段は私語禁止という決まりを皆しっかり守っている

「まあー見てくださいなあちらにいるのは白雪姫様じゃありませんこと」

「いつ見ても白く雪のようで儂い姿は癒されますわー」

皆の視線の先では1人の少女が本を片手に歩いていた

その少女身長は150cm前半と少々小柄。生まれ持ったのアルビノ体質らしく腰まで伸びよく手入れの行き届いた白い髪、透き通るような白い肌、宝石の様な綺麗な碧い瞳、そしていつどの季節に見てもつけてるマフラー

彼女の名は月影 舞雪（つきかげ まゆ）常盤台中学に通う2年生
Level 5の第6位。能力は影使いシャドウマスタ裏での通り名は影法師

だが表の住民で彼女の能力まで知ってるのはごく僅か
よってその美しく儂い見た目+名前に雪が入ってることからなどで白雪姫と常盤台生からは呼ばれているが舞雪はそんな事知らない。というか興味などないのだ。舞雪は本さえ読めればそれでよし、授業にもでないでいつも図書館の殆ど人が来ない端っこにいる。

常盤台には学園都市が誇る超能力者Level 5がもう2人いる

序列第3位常盤台のエース超電磁砲御坂美琴、第5位常盤台の女王メンタルアウト心理掌握食蜂操祈

彼女達の事は常盤台生もよく知ってるが舞雪については実はよく知らない。なぜなら先程も言ったが彼女は本さえあればいいのだ。コミュニケーションを取ろうとしない彼女に話しかける勇氣もなく皆想像で舞雪について語る。そんな噂が色々先走り謎めいた感じも舞雪の人気の1つであった。

「……………今日は久しぶりにあー君に会いに行こうかな……………」

周りの声なぞ聴こえてないのか彼女はポツリと呟く

2話

放課後人気のない図書館

1人の少女が能力を発動する

するとスーツと影に吸い込まれるように少女は音もなく消えた

第七学区とある学生寮前

「……………この時間なら……………あー君は寝てるはず……………」

少女は咳き目的地まで足を運ぶ

「……………ンァ……………寝すぎたかァ……………今何時……………だ……………ハ？」

少年が起床すると目の前に電気もつけずに本を読んでいる少女がいた

「……………人の家でなアにしてんですかアアア？影法師
さアアアアアン!?」

そうこの少年は学園都市230万人の頂点Level 5の第1位
一方通行

運動量・熱量・光・電気量etcといったあらゆるベクトルを観測
し、触れただけで変換する能力をもつチートもいとこの最強の能力
者である

「……………」

「ツチ、シカトかよ」

「……………読んでる……………」

「そんなの見ればわかるンだよ！テメーは読書しに来たんです
かアアアア!?アア!?」

起床してそうそう何食わぬ顔して目の前にいるしつれいな来訪者
に叫ぶ一方通行

「・・・静かにしてほしい・・・今・・・本・・・読んでる・・・」

「だアからテメーは何しに来たって聞いてンだよ
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「・・・ご飯作ってきた・・・コーヒーだけじゃ・・・体によくない・・・」

「・・・タッチ!」

結局しばらくして本を読み終えた舞雪とともにかなり遅めの朝食をとる

食事中の2人の間に会話は無い

食事を終えると舞雪は一方通行の方をチラッと見て何も言わずにスーッと消えた

「・・・タッチ!アイツは俺なんかにかまって何がしたいンだ・・・」

1人月を見ながら呟く一方通行だが、その口元は少し笑っていた気がした

――
1年前

最近行われた身体検査で舞雪の生活は変わった

今までlevel4だったのがlevel5になったのである

だが舞雪は能力が上がったことなんか興味ない

しいて言えば奨学金の金額が増えるから今よりもたくさん本を
えるって程度

その場にいた先生達は大騒ぎだったが舞雪は身体検査が終わって
すぐに読みかけの本を読んでいた

そして駆け寄ってきた先生達を見て読書の邪魔になると判断し、能
力をつかって逃走

た
後日学園都市中が新しいlevel5の事で話題は持ちきりだっ

た
尊敬の眼差しを向けながら話を聞こうと近寄ってくる常盤台の生
徒達

逃走

身体検査のあと突如消えたことについて話をきこうと先生が近
寄ってくる

逃走

取材したいとTVや雑誌関係者が近寄ってくる

もちろん逃走

もはやLevelsとなった舞雪を捕まえるのは容易ではなく、皆新しいLevelsの情報を得ることが出来なかったのである

そんな中つい最近Levelsになったばかりなら勝てんじゃね？
的なスキルアウトにも頻繁に絡まれるようになった

前からたまに絡まれたりはしてたがここ最近は前からのあわせでも数が多すぎる

最近落ち着いて読書が出来ないことに舞雪は珍しくイラついていた

私がLevelsになってから絡んでくるやつらはまあいい。

ほとぼりが冷めれば自然と減っていくだろう

だが前からのやつらはどうしたらいい？

その件に関しては私は完全にただの被害者だ

その日、次に前からの件で絡んでくるやつがいたら少し痛い思いを

してもらおうことに決めた

「おい！お前一方通行だな？テメーを倒せば俺たちが最強だ！まさか女だったとはなあ！」

ケタケタと笑うスキルアウト達

そう。前からの件というのはその容姿から一方通行に間違われることである

白い髪、白い肌。まあ確かに条件は当てはまる

ただそれだけの理由で決め付けられ絡まれる

初めの頃は反論したが

第1位様を倒そうと思ったたらこんな小柄な少女だったとか楽勝じゃね？と盛り上がるバカ共には話しなんか通用しなかった

それから絡まれるたびに逃走、逃走、逃走、逃走。

逃げ回ってる間に第1位様はスキルアウトの俺たちにビビって逃げやがった。実は弱い。などの噂も広まり挑戦者は増えるばかり

ちなみにその噂を信じ、本物の一方通行に挑み散っていったバカ共の件はまた別の話

と、まあこんな感じである

少女を囲むスキルアウトの数は20人弱

彼らの表情は第1位（彼らの勘違い）を前にして皆余裕がある

それもそのはず彼らの前には小柄な少女が1人、しかもいつも攻撃せずに逃げる

まあ気持ちはわからんでもない

だがいつもはすぐ逃げる第1位様は機嫌が悪かった

「ドドサッ」

急に彼らの1人が意識を失い倒れたのである

その後も

「ドサ、ドサ、ドサ」

と、倒れていく仲間たち

「テメー何しやがった!!!!!!」

その不気味な現象に焦りを感じリーダー格と思われる少年が叫ぶ

「……あなた達は……運が……悪い……」

その問いに対して少しも臆せず無表情で答える少女

「ッチー！お前らやつちまえ！人数はこっちの方が多いいんだ負けるはずがねえ!!」

リーダー格の少年の一声で一斉に迫ってくるスキルアウト達

だが少女は動かない

ましてや本を読み始める。

まるでお前達に興味なんかないといわんばかりの態度に全員が苛立ち攻撃しようとした矢先

全員が異変に気づいて足を止めた

何かがおかしい

確か仲間は20人弱

数人先ほど倒れたから今は15人くらいのはずだ……だが今は……

「つわあああああ」

1人が叫びその違和感の理由が判明した

自分達の影が自分達と同じ大きさになり1人1人の後ろに立っていたのである

そう少女は第1位ではない。第1位には及ばないにしても学園都市が誇るLevel 5の第6位影使い

少女が能力を発動してからスキルアウト達は数分と持たなかった

あるものはその光景に気絶し

あるものは自分の影に攻撃するも実体のない影に攻撃など食らうわけもなく倒され

あるものは逃走したが、何分持つだろうか。

自分の影から逃げ切ることなんか出来るはずがないのに・・・

その後少女に敵対したスキルアウト達はこぞって影に怯えるようになり暗闇から出ようとしなかった

そんな感じで敵対してくるスキルアウト達を軽くあしらっている
うちにいつしか気づいたら

『影女』

などという都市伝説が出来ていた

3話

『影女』の噂がスキルアウトに流れ始めてから数日後

「ひい！勘弁してくれ！あんたにはもう手を出さないし仲間にもそう言っとく！」

「……教えてほしいことがある……」

「!!!俺の知ってる事ならなんでも答える！だから勘弁してくれ!!!!」

「……一方通行がどこにいるか知ってる?……」

「……え？あんたが一方通行じゃないのか？」

「クリとつなずく少女

「マジかよ……人違いなうえ多人数で攻めて負けたのか……少女に……」

「いや！そうじゃねえ！すまなかったなお嬢ちゃん！どうやら俺達の勘違いだったようだ！」

「……………別にいい……………と」らで知ってるの?……………」

「すまん俺は知らないんだ…だが待ってくれ!俺の仲間知ってそう
なやつに連絡してみる!」

そういつてどこかへ電話をかけ始めた金髪の青年

「待たせたなお嬢ちゃん!どつやら一方通行は第七学区の学生寮に住
んでるらしい!」

「……………そう……………」

少女は一言だけつぶやき去るつとする

「ま、待ってくれ!お嬢ちゃん行ってどうするんだ?あいつは化け物
だぞ?お嬢ちゃんも強いが勝てるわけがない!悪いことは言わない
あいつに関わるのはやめときな!」

「…………………………」

青年の言葉など聞こえてないかのように歩き続ける少女

「え？あれ？無視？」

「わかった！じゃあせめて名前と連絡先を教えてください！なにかあったら助けに行く！あなたには迷惑かけたしな！」

「……………ナンパ？……………」

「ちっげええええええええええよ！いや、待てよセリフだけならナンパか……確かにお嬢ちゃん可愛いし……ってちが！俺は心配して！俺の名前は浜だってもういねえし……………」

第七学区とある学生寮前

「(なんなんですかアこの女は?)」

一方通行はいきなり目の前の現れて手をちよいちよいとしてる少女に戸惑っていた

「……………お嬢さんこっちにおいで……大丈夫怖くないよ……」

「どーをどー見たらウサギに見えるんだよてめーは!!!!」

「……………むむむむむ……野生はやはり手ごわい……だったら……」

なにやら眩きながらガサゴソとかばんから弁当箱をとりだす少女

「……これあげ」「いらねエエエエよ！お前舐めてんのか？ああ？
だいたいなんでプチトマトなんだよ!!!」

「……お昼の残り……」

「オーケイ。愉快的オブジェになりたいようだな消える」

ドゴオン!!!能力を発動して死なない程度に少女を殴る

いつも通りそれで終わりのはずだった

「……おかしい……餌付けも失敗……いったいどうしたら……」

だが少女は無傷。何事もなかったかのように立ち上がりぶつぶつと呟いている

「(ああ？なんで無傷なんだあいつ……!!!よく見たらあの容姿あいつの能力も俺と同じ反射なのか？だが反射された感じはしなかった……ツチ！もうちょい試してみるか)」

次に一方通行がとつたのはただ足元にある石を少女に向けて蹴るだけ

ただそれだけなのだが蹴られた石はベクトル操作によって凄まじい速さで少女に向かっていく

力の無いものがうけたらそれだけでひとたまりも無い威力をもつ

て

だが少女に当たるはずの石は少女の影によって消滅した

「ッハ！その能力お前第6位か！」

「……私は敵じゃないよ……ただちょっとナデナデしただけだよ……」

「いいねエー！俺もまだLevel5とやりあったことは無いんだよ！
なんの用でここに来たかは知らねエが少しは楽しませてくれんだろ
うなァ第6位さんよォ？」

「……チチチチ……うさぎさんおいでおいで……」

「ククク……まさかLevel5とやりあつ日がくるとはなァ……だが
まァ6位程度じゃ俺には届かねエ……力の違いを見せてやるよ!!!!」

「……は！まさか喉が渴いてたのか……ちょっと待ってて……今
買ってくるから……」

「……いや、お前まだ俺がウサギだと思ってるの？」

てかあれ一方通行じゃね？

え？それって第1位の？

第1位がレイプとか・・・

と、なんとも恐ろしいことを呟きながら通行人が集まってくる

「ツチ！テメーちよつと来い!!!」

一方通行の部屋

腕を組み仁王立ちの少年と正座してる少女

「で、勘違いで襲われるのが嫌だから原因の俺を倒そうとここまでき
たと」

コクリ

イラ

「そしたら大きなウサギさんがいて仲良くなろうと努力したと」

コクリ

イライラ

「そしたらそいつはウサギさんのフリをした一方通行だったと」

コクリ

イライライラ

「騙されたショックで悲しくなりどろどろでもよくなって帰るつもりしたら襲ってきたと」

「ククリ」

イライライライラ

「だからあんな事を叫んだと？」

「てへへへ」

イライライライライライライライライライライラ

「全部お前の勘違いじゃねーか！だいたい俺はウサギのフリなんかしてねエンだよ！しかもなんだ？レイプだと？お前みたいなババアにこの俺が欲情するわけねえだろ！5年ほどおせーんだよ！それに」
「てへへ」
「とかお前のキャラじゃねーだろが！」

「.....」

「シカトしてんじゃねーよー！」

少女達の夜は更けていく

4話

時は戻りとあるファミレス

「おい、浜面。2秒以内に飲み物持ってこい」

「はあ、言われないと出来ないとか相変わらずアリにも劣る超使えなさを発揮してますねアリ面」

「結局アリ面なんか相手にしてるよりサバ缶を眺めてる方が有意義つてわけよ」

「大丈夫。アリよりも使えないはまづらを私は応援してる」

「ひい！待て麦野！2秒じゃ行つて戻つて来ることすら出来ねえ！あと絹旗、フレンド人様をアリ呼ばわりするんじゃないやねえ！う…：俺の味方は滝壺だけだぜマイオアシス」キリッ

「うわぁ超聞きましたか滝壺さん！マイオアシスですつて！超無能で超キモイ超アリ面がなんか言ってますよ！超鳥肌ものです！」

「うーん、このサバ缶より前に食べたやつのが美味しかったつてわけよ」

「大丈夫。どんなに鳥肌がたつても私ははまづらを応援してる」

「はい、2、1、死ね。」

「いやああああ！麦野さんやめて！お願い！死ぬ！ちょ！マジで死

ぬ！」

まるで奴隷のような青年と4人の飼い主がいつもの用にファミレスにいた

彼女達は「アイテム」という名の学園都市の闇に潜む暗部のメンバー

ちなみに先程から青年をビームのようなもので攻撃してるのはリーダーの麦野沈利

Level 5の第4位

その凄まじい攻撃をなんだかんだ避けてる青年も実は結構凄いのだろうか

「お前らなあー！もうちょっと女の子らしく出来ないのかよ！すぐに罵倒したり攻撃してきやがって！ほら見ろ！あそこにいる女の子のなんかお前らの正反対じゃねーか！1人静かに読書をし、髪を耳に付ける仕草なんかって、あれ？あの子どっか？」

「え？まさかこの超冴えなくて超使えない浜面に女の子の知り合いですか？超信じられませんね」

「まあさっきの暴言については後でブチコロスとして、確かにあの子可愛いわね。知り合いってのもどうせお前の妄想だろ」

「ちげーって！確かにどっかで・・・あ！あの時の少女か！あと麦野さんごめんさい。ちょっと調子に乗りすぎました」

「えー本当に超知り合いなんですか？あの子超常盤台の制服着てますけどっ」

「どうせ浜面のことだから」サバ缶あげるからちょっと触らせてよっ

「ヒヒ」とか言ったんじゃないの？」

「大丈夫。はまづらに妄想癖があっても私は応援してる」

「おい、フレンダ。サバ缶で体触らせてくれる女なんか全世界でお前しかいねえよ。てかみてるお前ら！本当に知り合いだって証拠を見せてやるよー」

そういつて浜面と呼ばれる青年が常盤台の少女に近づいて行く

「ようお嬢ちゃん久しぶりだな！元気してたか！」

「……………」

「超無視されてます」

「結局浜面の妄想だったってわけよ」

「おい、あのバカ回収してこい」

「え？また無視 お嬢ちゃん俺だよ！ほら、あの時裏路地で勘違いして、はいはい。すいません知り合いが超ご迷惑をおかけしました。超妄想癖変態野郎なんで気にしないで下さい」

無視された事により必死に騒ぐ浜面だったが麦野に命令されて回収にきた絹旗に割り込まれ連行されそうになっている

「……………あの時の……………」

「!!!!!!」

ただの妄想だと思ってただけに驚くアイテムのメンバー達

「ほら見る！ちゃんと知り合いじゃねーか！お前ら人の事を妄想癖の変態だなんだ散々言ってくれやがって！」

「え？え？あなたみたいなお超可愛い常盤台のお嬢様がこんなのと超知り合いなんですか」

「ククリと頷き当時を思い出しながら少女は答える

「……1年前くらいに……裏路地で……」

「そうそう！裏路地ですって、もう1年もたつのかー」

「……集団で襲われた……」

「え」

女性陣ばかり

そして約1名は世界の終わりかのような表情をしている

「……集団で襲われて……可愛いねって……」

「ちよっ！お嬢ちゃん 嫌だなーどうしたんだ急に？」

「そのままじゃマスズイと必死にごまかす青年

「……最後に2人きりになったら……ナンパされた……」

ピキ

「ブ・チ・コ・ロ・シ確定ね」

「まさか超変態で超性欲の塊だと思ってましたが、こんな超可愛い子をレイプまでしてたなんて・・・」

「お、お嬢ちゃん私のサバ缶全部あげるから元気出して欲しいわけよ！」「アタフタ

「はーまーづーらー？」「ゴゴゴゴゴゴ」

「イヤアアアアア！誤解だ！俺はレイプなんてしてねえ！未遂だ！レイプ擬きってやつだ！ってあれ？」「ダラダラダラダラ

途中で自分の発言のおかしさに気付いて汗が止まらない青年

「イヤアアアアア！不幸だあああああ！」

数秒後ファミレス内で処刑という名のお仕置きが始まるのであった

5話

数分後

「ふーん。つまり人違いで襲ったけど結局返り討ちにあったってわけ。ブチコロシが足りなかったかしら」

「超迷惑極まりない事をしただけでも超カス面だつてのに負けたとか超存在意義すらありませんね」

「てかてかこのお譲ちゃんそんなに強いつてわけ!？」

「大丈夫。はまづらに存在意義がなくても私は応援してる」

「くそ・・・お前ら言いたい放題だな・・・でも確かにお譲ちゃんすげー強かったな。いったい何者なんだ? てかなぜ1人でファミレスに?」

「超質問攻めとか気持ち悪いですね。飼い主として超しつけなくてはなりません」

処刑という名のお仕置きが終わり事情を整理するアイテムのメンバ―

「.....」

「相変わらず超無視されてますね」

「おい譲ちゃんこいつの件は悪かったな。でもあんた話を聞く限り高位能力者だろ？」

「……………」

ピキ

「はーん？何シカトしてるのかにゃーん？」ピキピキ

「はあはあ…怒ってる麦野も刺激的で可愛いつて」死ね」ズガン

「おいやめる麦野。こんなところでメルトダウンーぶっぱなすな」

「…………南南西から信号がきてる…………」

「…………人…………待ってる…………」

目の前でいつまでも騒がれると読書の邪魔になるので仕方なく答える

「お！人待ちってことは彼氏か？彼氏だな？ちくしょー！誰だ！こんな可愛い子と付き合ってる野郎は！しかも女の子を待たせるとか許せん！来たら説教してやるー！」

「はあ。何興奮してるんですか。超気持ち悪いんで静かにしてください」

「で、結局あんた何者よ？」

「・・・常盤台中学2年・・・月影舞雪・・・」

「ふーん。で、Levelは？」

「・・・Level15・・・」

「!!!!!!」

まさかの返答に驚きを隠せないアイテムのメンバー達

「常盤台のLevel15って事は・・・あんた去年話題になった第6位だろ？」

「・・・うん・・・」

さすがにLevel15誕生で話題になってただけに多少は舞雪の事を知っているらしい

「ちょー！Level15に喧嘩売るとかシャレにならないわけよー！」

「はまじらよく生きてたね」

「そう・・・あんたが第6位ね・・・」

麦野は舞雪を見定めるように見ている

仮に自分たちの敵になるならいつでも殺せるように軽く身構えな

がら

そこに1人の少年が現れた

「あ？何してんだお前？他に知り合いがいんなら俺は帰るぞ？」

「……あ……あー君遅刻……」

「テメーなんでこんなところに！」

現れたのはもちろん一方通行

一方通行のことを知っていた麦野はいち早く気づき殺気をはなつ

「あーお前第4位か。やめとけやめとけ。お前じゃ俺にh「テメーが舞雪ちゃんの彼氏かあああー！こんな可愛い子を待たせてもいいと思ってるならそんな幻想は俺がぶち壊す！」

誰かさんのセリフを吐きながら浜面が殴りかかるが

ピキーン

「ぐへえあ

勿論反射

「おい、第4位。飼犬の躰くらいちゃんとしろよ」

「ッチーやめとけ浜面。こいつ第1位様だ。お前じゃどうあがいても瞬殺だよ」

「ちょー第1位ってことはこいつが一方通行か!?なんでこいつが舞雪

「ちゃんど・・・」

「ところでさっき彼氏が来たら超説教するとか言っていましたね。浜面のかっこいいとこ見たいので超早く説教してくださいよ」「ニヤニヤ

「浜面。お墓にサバ缶持ってってあげるから悔いの残らないように説教したほうがいいってわけよ」「ニヤニヤ

「しつねきさんこんにちわ」「ペ」「リ

「ちょーおい！お前ら余計なこと言うな！そんなことしたら俺が殺されてしまうだろー！」

「お前・・・こいつらとどついつた知り合いなんだ・・・？」

一方通行は目の前の騒ぎを呆れ眼で見つめながら呟くが

「・・・あー君は何食べる？・・・」

どつちやら舞雪は目の前のことなんか気にならないらしい

「はア。お前マイペースすぎるだろ・・・」

「おっ姉様ー！今日は！今日こそは！黒子とデートしましょうー！そしてそのまま夜は2人で愛を確かめつつ・・・」グへへ

「はいはい。あんたとデートなんてしないわよ。それに今日は佐天さん達と会う約束でしょーが」

黒子にお姉様と呼ばれてるのは御坂美琴

常盤台のEースでLevel5の第3位超電磁砲

多分同年代に友達がない可愛そうな・・・ゲフンゲフン
尊敬されすぎて友達なぞ恐れ多いと思われる少女である

「で、黒子、『影女』のことはなんかわかったの？」

「それが犯人は女で高位能力者ってこと以外さっぱりですよ」

「ふーん『影女』ねー。まあ高位能力者なら黒子も気をつけなさいよ」

「!!!!!!
お姉様！黒子を心配してくださいさるのですね！でしたら今夜は・・・
ハアハア」

「いい加減にしないと電撃浴びせるわよ」

柵川中学

「うーいーはーるー！」パサア

「ぎゃああああ！何するんですかああ／＼／＼／」ポカポカ

「お？今日は水玉だねーでもたまには大人っぽいやつでもいいと思うよー」「ニヤリ」

「そんな事どうでもいいんですよ！それより早く白井さん達と合流しないとー！」

「あーそうだったね！じゃあ行こっか」

いつも通り仲のいい佐天と初春

「ところで佐天さん白井さんにあれほど言われたのにまだ『影女』の事調べてたんですか？」

「んー違うよ。ただちょっと気になる噂を聞いたからさー」

「噂・・・ですか？」

「まあ詳しい事は御坂さん達と合流したら話すよ！さあ行くよ初春」
「！」

「ちょっと待ってくださいよ佐天さん」

6話

とあるファミレス内

「あ、白井さん達来ましたよー！」

「ごめんねー遅くなって黒子が色々としつこくて・・・」

「嫌ですわお姉様。あれは黒子の愛情表現ですのに」

「ハハハ・・・相変わらずですね・・・ではさっそく本題に入りますか！」

どうやら今回集まった内容は佐天涙子が『影女』の情報を手に入れたらしく

風紀委員である黒子、その先輩の御坂美琴に伝えるためだったようだ

「で、佐天さんは以前注意しましたのにまだこの件に首をつっこんでいたのですね」「ジュー」

「いやいやー！初春にも言われたけど違いますって！ただ噂を聞いただけですよー」

「噂？」

美琴と黒子が首をかしげる

「なんとー！今回私が聞いた話によると『影女』の正体は常盤台の生徒らしいですよー！」

「その情報は確かですか？」

「まああくまで噂なのでなんとも言えないんですが、犯行現場から常盤台の制服着た子が地面に吸い込まれて消えたのを見たって人がいるんですよー」

「ふーん。地面に吸い込まれるねー。一体なんの能力者なのかしら？」

「でも仮にもしその証言が本当だとしたら犯人を捕まえるのは簡単ですわね」

「え？なんですか」モグモグ

「はあ。初春あなたそれでも風紀委員ですか？ちょっと考えればわかるじゃないですか。まあ仮にですけど常盤台の生徒だとしたら犯人をかなり絞れるし思い当たる能力で捜査すればさらに絞れるんですのよ？それに常盤台生なら能力がお姉様より上ってことはないでしょうし、よくてLevel4ってとこでしょっ」

「え？でも常盤台って他にもLevel5いませんでしたっけ？」

「たしか第5位と第6位ですね」モグモグ

「あー私あいつ苦手なのよねー本当に中学生かっつての」ハア

「お姉様！黒子は食蜂先輩よりお姉様の慎ましいお胸のほうが」アンタはちよつと黙ってなさい！」「ビリビリ　ンギヤアアアア！モット！モットハゲシクオネゲイシマスオネエサマー」

「御坂さん、その2人はどんな人達なんですか？」

「んー第5位の方はとびつきりゲスイ能力を持ってるわ。第6位の方はよくわからないのよね・・・あの子あまり喋らないし・・・そうそうちょつどあんな感じの子よ・・・」

そう言って美琴はにぎやかな集団の中で1人静かに読書してる少女を指さす

「お姉様、あちらにいるのは本物の白雪姫様じゃありませんこと？」

「え？嘘？あ、本当だ・・・佐天さん、あの白い子が第6位よ」

「ほうほう。でも御坂さん隣にももう1人白いのがいますよ？お兄さんですかね？は！もしかして彼氏さんかも！私ちよっといっってきたすねー！」

「ちよ、佐天さん待つてよー！」

野次馬心にひかれて佐天が舞雪に近づいていく

どつやら隣にいる一方通行が彼氏だったら面白いと思ったようだ

「こんにはー私は佐天涙子っていいいます！あなたは常盤台の第6位さんですよね？御坂さんから聞きましたよー」

「・・・ん？ピカチュウの知り合い？」

「誰がピカチュウだゴラァァァ!!!」「ビリビリ」

怒りにまかせて能力を発動するがくらったのは浜面だけ

「ぐは・・・なんで俺が・・・」

「なんだア？この現れるなり鬱陶しいババアは？」

「・・・ババアじゃないよ・・・ピカチュウ・・・」

「だからピカチュウってのやめなさい舞雪！私は御坂美琴よ！み・さ・か・み・こ・とー！」

「あーその名前お前第3位かア」

「ちよっとちよっと！こんな庶民的なファミレスにLevel 15の1位、3位、4位、6位が揃っちゃったってわけよ！」ハラハラ

「まあドンパチが始まらない事を超祈るしかありませんね」

「ぴかちゅうさんこんにちわ」ペコリ

「ああ？第3位だ？まさかこんな乳臭い糞ガキだったとはな」

「は？誰よオバサン？」

「あ？殺んのか」ミラ!!!
「」

「ちょ、お姉様！こんなところでおやめくださいな！」

「そそそそそうですよ！麦野も超おさえてください！」

今にもバトルが始まりそうになっていたが2人共お付きの者になんとかなだめられる

こんなところでLevel5が本気で戦ったら被害がハンパない事になるのは誰が見ても明らかだからである

・
・
・
・
・
・
・

「で、なんであんたがこんなところに男といるのよ？てかこいつ誰？」

「殺されてエのかババア」

「ちょ！ババアってなによ！私はまだ中2よ！あんたと一緒にいる舞雪とタメなんだからね！」

「ババアじゃねエか」

「ういっ……」「イライライラ」

「……あー君は……私の……ともだち」お2人はお付き合いされて

「お姉様！黒子達も負けていられませんわ！早く拳式をあげませんと
」

「やっぱり私の予想は当たってたんですね！さっすが私！」

「皆さんお店に迷惑ですからもう少し静かにしないと・・・」

やはり女性が集まると（1人男もいるが）恋愛話は盛り上がるらしくそれぞれが思い思いのことを口にする

「ああ？お前ら何勘違いしてんだ？俺がこんなババアと付き合うわけねえだろが」

「.....」
「シュン」

「.....」
お前は女心をもっと勉強しろ！
「.....」

「ッチーっぜーな・・・中学生なんか立派なババアじゃねーか」

「.....」
（こいつまさかロリコンなのか？）
「.....」

ロリコンの疑惑をかけられてる事なんか知らない一方通行であった

7話

さつそくだがもしも君だったらどうするだろうか

財布を無くすのは日常茶飯事、町を歩けば不良に絡まれ

毎日のように何かしらトラブルに巻き込まれる

しまいには幼少期に疫病神などと周りの人間に呼ばれ毛嫌いされる

そんな『不幸』に愛されて十数年生きてきて心が折れないものだろうか？

普通の人間ならそんな神の仕打ちに耐えられず心が折れてしまうだろうか

自ら命を絶ってしまう輩もいるかもしれない

だがこの少年『上条当麻』はそんな神の仕打ち程度では折れなかった

そう、折れなかったのだ。

だが精神は歪みかなり腐った考えの持ち主になってしまった。

上条当麻はいたって普通のただ人よりちょっと不幸な少年である

ステータスでいえば容姿B 運動神経A 学力E 財力Dぐらい

だろうか

そしてこの学園都市特有の評価を加えればLevel10

つまり無能力者である

そんな彼がこの科学の総本山であり超能力者が大勢いる学園都市で邪な事なんかできるはずもないのだ

だが彼は神に愛されている

人より少しばかり不幸だが彼は神からもう一人とは違う能力を

もらっていた

それは彼の右手に宿る「幻想殺し」と呼ばれるもので超能力、魔術などあらゆる異能の力を打ち消してしまうのにその中二病

だがしかしこの町では無双をかませる能力である

そしてそんな彼の戦闘方法はいたって単純

能力を打ち消し接近戦に持ち込み男女平等の精神に乗っ取りそげぶ（殴る）

持ち前の運動神経と幻想殺しがあれば大抵の能力者なら倒せてしまふのだ

「ぐへへ、さあ今日は誰をそげぶしようかなー・・・確か昨日は財布を拾ってくれた心優しい女の子をそげぶしたんだっけな・・・んー今日は常盤台のお譲さまあたりでもそげぶしてやりますか。まあ肩でもぶつけていちゃもんつければいいだろ」

クズである

文句のつけようがないクズである

だが許してあげてほしい

今まで歩んできた人生が過酷すぎたのだ

歪まない方がおかしい

いやだがむしる命を絶ってくれてた方が・・・

「おーちよつどいいところにいるじゃねーかお譲さまが。俺に目つけられるなんてあの子も不幸だな」ジュルリ

上条の前方に5〜6人くらいの常盤台生がいた

どつやら彼女等を今日の獲物に決めてしまったらしい

「女王ーもつ食べてはなりませんーそれで3個目ですよーそんなにエ

クレアばかり食べてたら女王の完璧なプロポーションが崩れてしま
いますわー！」

「んーうるさいわねえじゃああなたが食べなさい。はいエクレア20
個早食いに挑戦だゾ」ピッ

女王と取り巻きに呼ばれている少女がリモコンを操作すると目の
前の少女が言われた通りエクレアを食べ始めた

ド
ン

「いってーな・・・こんなところでエクレア食ってんじゃねよーおらー！」

有無を言わず殴る上条

「ちょ、ちょっとあなたいきなりなにするんですのー！」

「女性を殴るなんて最低ですわー！」

と、取り巻きA・B

「うるせえーいいから黙ってそばをされろやー！」

ド
ド
ド
ー
ボ
ー
ー

「う・・・女王早くお逃げに・・・」

それだけ言い残し殴られた少女は気絶してしまった

「ちょ、なんなよあんたあ・・・こうなったら能力で・・・エイー！」ピッ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「今何かしたのか？」
??????????

幻想殺しがある上条に能力は効かないのだが少女は知らない

「なんで効いてないのよぁ・・・私はLevel5なのよぁ・・・」

どうやら少女は自分の能力に絶対の自身を持っていたらしく
その能力をくらっても平然としてる上条にひどく動揺し涙目になっ
てしまった

「よく聞けよ最強。Level5だからってなんでも思い通りになる
なんてそんな甘ったれた幻想は俺がぶち壊す！」キリッ

「ちょ、やめ、やめておねえ」オラァー！

ドコ！ボコ！ドス！ガス！

「・・・・・・・・・・」ピクピク

「ふう。今日はこのくらいで勘弁してやるよ。この程度で済んだん
だからお前は幸せものだぞ？ってもう聴こえてねーか」

満足したのか上条は捨て台詞を吐き立ち去る

「あーもうちょっととそばぶしたい気もしくもないんだよーあ
のファミレスにいる白い子可愛いじゃねーか！よし！最後はあの子
にしようー！」

ところで普通なら上条のやってる事は犯罪である

だがしかし上条にはそんな事関係ない

なぜなら上条は神に愛されているからである

今までの不幸を考えれば一度や二度や三度や四度その辺の人を殴
るくらい許されてもおかしくないのだ

そんなわけもなく

「くー！あの白い肌が赤く染まると思うと興奮す」

あの人です！あの人がさっき常盤台の女の子を殴ってた人です！

「お前が通報にあつた少女暴行の犯人じゃん？ちよつと署まで来て話を聞かせてもらおうじゃんよ」

と、長身の女性

「え？ちよ違いますよ！俺じゃん」いいから早く来るじゃん！」

「ちきしょう！不幸だあああああ！」

1人の暴行魔が連行されて行く

8話

「おなかいっぱいご飯を食べさせてくれると嬉しいな」

「……………」

「無視しないで欲しいんだよ！」

—————

Level 5ファミレス大集合から数日後

今日の天気は晴れ。素晴らしい快晴だ。こんな日は一日中読書に限る。快晴だからこそ外出するなんかばかげている。外で本を読んだら汗をかいてもしかしたら本にたれてしまいかもしれないじゃないか。そのせいで本に染みができたらどうしてくれるんだ。考えるだけでも恐ろしい。舞雪は引きこもり持論を頭の中で展開しながら能力を発動してある場所を目指す。

普段舞雪は美琴達と同じように寮に住んでるのだが実はもう一つ部屋を借りている。

なぜなら寮にこれ以上本を置くと寮監に怒られてしまうからだ。つまりもう一つの部屋は舞雪が本を読むためだけの部屋なので家具等は必要最低限しか揃えていない。

「ふう」

部屋に着きとりあえず一息。あたりを見渡すと本・本・本・本・本。

なんて落ち着く部屋なんだここは。いつそのことこつちに引越そうかなどと考えつつ念願の読書開始。する前に換気でもするかと窓を開けたらベランダに修道服をきた女の子がいた。

「おなかいっぱいご飯を食べさせてくれると嬉しいな」

「……………」

「無視しないで欲しいんだよ！」

ピシャッと窓を閉めついでにカーテンも閉める。どうやら私は疲れているらしい。最近本を読みすぎたのだろうか？まさか幻覚を見るほど疲れがたまってたなんて…

ドンドンと窓を叩きキーキーなにやら騒ぐ音がきこえる。どうやら幻覚ではないらしい。仕方なく窓を開けてあげると

「いきなり無視なんてひどいんだよ！迷える子羊をみつけたら手を差し伸べてあげるのが常識なんだよ！」

「……………人違い……………」

そういつて再度窓を閉めようとするが

「話がかみ合っていないんだよ！だからおなかいっぱいご飯を食べさせてくれると嬉しいな」

ガシッと窓を掴まれてしまった。ところでこの子も話がかみ合っていないのだが…

「私はねインデックスって言うんだよ」

やかましいので部屋にいられて話を聞いてみるとどうやらこの子の名前はインデックスらしい。なんて素晴らしい名前なんだ。娘の名前に目次などと名前をつける親もさることながら、この子も本が大好きに違いない。なぜなら先ほど10万3000冊の本を暗記してるとかどうとか言っていたし。とりあえずこの子はいいい子に違いないと1人うんうん頷く。

「……月影舞雪……よろしく目次ちゃん」

「ムキー！目次て呼ばないで欲しいんだよ！インデックスって呼んで欲しいかも」

「……………」

なんで無視するんだとインデックスが騒いでいる。いい子なのは認めるが正直うるさい。本を読もうと思っただのに早くも30分近く時間を浪費してしまった。仕方ないので餌付けして黙らせることにし部屋にあるものなら好きなだけ食べていいとつげた

しばらくして部屋にある食料をあらかた食いつくすととりあえずは満足したようだ

「まゆは本が好きなんだね。私もちょっと読んでみたいかも」

コクリと頷き了承する。本が好きで本が読みたいというのなら好きなだけ読んでくれて構わない。

この部屋に今ある数はまあ大体2000冊くらいあるが彼女のペースならすぐに読み終えてしまうだろう。しばらくしたら舞雪は読んでた本を読み終えてしまったので次の巻を買いに行こうと立ち上がる

「……私は出掛けるけど……目次ちゃんはどつする？」

「んーじゃあ私も」をでるよ」

別にここにいってもいいと言ったが魔術師がくるとかなんとかでも狙われてるとなれば放り出すわけにもいかず

「……でも危ないんじゃ」

「じゃあ私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？」

少女の口からつげられたその言葉はなぜかとても重く感じ、悲しみを含んだその笑顔に舞雪は何も答えることができなかった

「じゃあ行くねー」

少女はそれだけつげると走り去ってしまった。

舞雪はなんだかとても煮え切らない思いにかられしばらく悩んだ後、能力を発動した

「今度はなんなんですかア？別に前にも用なんか無いんですけどー」

一方通行はめんどくさそうに話す。舞雪はあの後能力を発動して一方通行のところに来ていた。舞雪自信もかなりの本を読んではいたが魔術師についてはほとんど知らない。知っているとしてもそれは物語の中の話であってそれがインデックスの言う魔術師と一致しているのが全くわからなかったからだ。

調べようにもここは科学の街学園都市であって魔術などというものについては手がかりが見つからなかったのである。そこでlevel 15 第1位の頭脳を持つ一方通行ならもしかしてと思いここまで来てみたのだがどうやらとてもめんどくさそうにしている。

「はア？魔術だ？お前頭の中お花畑かよ？科学の街でいたい何をトチ狂ってやがるンだ」

どうやらさすがの一方通行も魔術についてはほとんど何も知らずむしろ訳を話してみたら馬鹿にされてしまった。

「……つかえな……」

「テメツ……イライラ」

ぼそつと呟くとどうやら聞こえてたらしくベクトルチョップをくらいそこで舞雪の意識が途絶えた

9話

「おい、いつまで寝てんだ」

一方通行の声で舞雪は目覚めた。

とうか誰のせいで気絶してたのか彼は本当に分かっているのだろうか？確かにボソッと何か言ってしまった気もしなくもないが女の子に対していきなり暴力はよくないでしょ？

舞雪は心の中でぶつぶつ文句を唱えるが口には決して出さない。そう、口は災いのもと。同じミスをするつもりはない。なにせベクトルチョップは結構痛いのである。

「ああ、魔術の件だが学園都市の外ならありえるかもな。この街の科学が恐ろしく発展してるように外の世界で魔術といわれるものがあったもなんら不思議はねえ」

どつやら舞雪が気絶している間に一方通行は多少考えてくれていたらしく、めんどくさそうにしながらも考えを教えてくれた。なんだかんだいって一方通行も舞雪の事を気にかけてるのかもしれない。

「……ンデレ」

「は？はアアア？違っげえし！お前もついいから帰れよ」

クスクスと笑いつつ多少皮肉を言いながらも舞雪はその一方通行の優しさが嬉しかった。

出会うまでは読書の邪魔になるだけの存在で、その後もつさぎさんのフリをしてダメしたりいきなりテンションMAXで攻撃してきた

り口は悪いしいつもめんどくさそうにしてるけどなんだかんだいつて今では一緒に出かけたり相談する仲にまでなっている。運命とはわからないものだ。自分の中で一方通行の存在が日々大きくなっていくのを感じながら彼との時間を舞雪は楽しんでいた。

「……もう外暗い……」

「そオですすねエ」

「……………」

舞雪は無言で送ってほしいと目で訴える。どうやら一方通行にもそれは伝わったらしい

「能力使って帰ればいいだろうが！」

「……………」

しばしの沈黙。こうなると舞雪はなかなか頑固なので梃子でも動かないだろう。その後一方通行が諦めたかのように大きなため息をつき見事送ってくれることになった。

学生寮前

「はあ」

上条当麻はイライラしていた。以前アンチスキルに捕まって以来どうやら完全にマークされたしまったらしく少しでも何かしようも

んならすぐにもアンチスキルが飛んでくるからだ。

まあ彼の日々の行いを考えればそれは至極当り前なわけでもしろ一般人からしたらとてもありがたいことなのだが彼からしたらたまったもんじゃない。すると彼の目にさらにイラつくものが映った。

「誰だよこんなところにシール貼りまくったやつは！人がイライラしてるっつのにー」

チツッと舌打ちをしながら学生寮の廊下に張り巡らせてあるシールを怒りにまかせて片っ端から剥がしまくっていった。こんなので彼のストレスが多少は発散できればいいのだが。

そのころ舞雪は一時のデート？を楽しんでいた。舞雪の前には一方通行。その後ろを舞雪が歩いてるわけだがお互いの間に会話は無い。だが気まずい沈黙ではなくむしろなぜかこの雰囲気舞雪は好きだった。

この時間が永遠に続けばいいのに。なんて乙女チックな事を考えては1人で赤面。そんな舞雪の一時の幸せな時間は静かな夜には似合わない突然の轟音で幕を閉じた。

ドゴオン!!!

どうやら轟音は学生寮の方かららしく急いで近寄ってみると火事でも起きたのか煙がすごくよく見えない。するとどうだろか黒煙の中から見覚えのある格好をした人物が1人でてきた

「……………目次ちゃん？」

「ムキー！だから目次って呼ばないで欲しいんだよ！あわわわ、それより早くまゆも逃げた方がいいかも！」

どうやら火事ではなくインデックスが何者かに襲われているらしい。という事は今彼女に対して攻撃をしている相手こそ魔術師というやつなのだろうか？舞雪は軽く身構えいつでも能力を発動できるように前方に集中する。ちなみに一方通行は欠伸なんかしちゃって興味なさそうである。

「人払いのルーンは効いてるはずなんだが…まあいい。彼女をこちらに渡してくれるかな？」

ゆっくりと黒煙の中からでてきたのは赤い髪、目の下にバーコード、そしてたばこをくわえた長身の男だった。

「…：…ねえねえあー君…あれて…：男の子的にかっこいいの？」

「オイヤめとけ。そういうのに憧れる年頃なんだよ」

ぼそぼそと一方通行に耳打ちする舞雪。それに対して一方通行はなんともあつけない。そっとしてあげるとは彼も丸くなったものだと内心考えながら黒煙からでてきた中二病を見る。

「な！／／／君達聞こえてるぞ！このよさがわからないなんて所詮は科学の街の住人か」

中二病は科学の街の住人と言った。なら彼が学園都市の外部、つまりインデックスの言う魔術師で間違いないだろう。相手の能力はわからないがインデックスを素直に渡すわけにはいかない。だがこちらには一方通行もいるし万に一つも負けることはないだと舞雪は結構落ち着いていた。

「・・・早く帰った方がいい・・・あなた1人じゃ勝てない。」

「ほう。舐めてくれるじゃないか・・・Fortiss931」

彼がそつつぶやいた瞬間空気が変わった気がした

「僕達魔術師は魔法を使う前に魔法名を名乗るんだよ。意味は『我が名が最強である理由をここに証明する』ってところかな」ドヤア

「・・・・・・・・ぶっ・・・・・・・・ぶぶぶぶ・・・・・・・・」

「オイだからやめてやれ。あいつが可哀そうだろ」

一方通行には止められてしまったがこれは卑怯だと思う。あんな見るからに中二病な格好をしている上に格好だけに飽き足らず、我が名が最強である理由をここに証明するときだ。これを笑わずに聞いてあげられるほど私は人間出来ていない。

「く・・・何がおかしいんだ！悪いがいきなり全力で行かせてもらおう！権限せよ！魔女狩りの王イノケンティウス！意味は必ず殺すさ」ドヤア

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「な！なぜ出ない！事前にルーンは配置してあるはずだ！イノケンティウス！イノケンティウス！イノケンティウス！くそ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あーこの子やばい。このままじゃ泣いちゃうんじゃないの？とす

がに笑えない雰囲気だしなんか見てるこっちまで泣きそうになって
きちゃったよ

「あアお前エ今日のところはもう帰れ。な？」

「く…今日のところは引かせてもらおう！命拾いしたね」

「……………頑張ってるね……………」

　　いったい彼はホントに魔術師だったのだろうか？とりあえず強く
生きてほしい。舞雪達は走り去っていく魔術師に憧れる青年の背中
を見ながらそんな事を考えていた。

10話

「いったいさっきの彼はなんだったのだろうか？もしかしてホントに魔術師というやつなのかな？でも魔術使えてなかったしそんなわけないよね。そんな事よりも・・・」

「あーくんも・・・決めゼリフ考えて欲しい・・・」

「はア　ンなモン考えるわけねエだろが！」

「魔法名は・・・Accelle111とか・・・笑笑笑笑笑笑」

「死にてエのかお前！」

なぜ111なのかというと第1位だしいつもぼっちで1人だし私の中でも1位だからなんて死んでも言えない

舞雪は軽く頬を赤くしながらも話を続ける

「Accelle111！・・・俺のベクトルに不可能はねえ！キリッとか言って欲しい・・・」

「だから言っわけねエだろそんな事！俺は中2病じゃねえんだよ！」

「…………え？…………」

「なんですかア？なんなんですかア？今日はやけに冗舌じゃないですかア？そんなに死にたいんですかお前は？」

ふう。ちよっとからかい過ぎたようだ。このままじゃ完全に拗ね

てしまう。ご飯でも作れば機嫌直してくれるかな？

「今日……ご飯作る……」

「話変えてンじゃねエよ！チツ……まアいいか。変なモン作ンじゃねエぞ」

その言葉を最後にその後2人に会話はなく、夜の街には似合わない雪のように白く何処か綺麗な2人は街に消えて行くのであった

翌日

昨日はあの後結局あーくんの家でご飯を食べた後帰宅した(勿論送ってもらった)帰宅した後何か忘れてる気がしたんだけどどうも思い出せない……

あー今思い出したわ。原因はあれだ。今日の前に倒れてるシスター……

「目次ちゃん……大丈夫？」

「ムキー！昨日私を置いて帰るとか酷いんだよ！おかげでお腹ペコペコなんだよ……」

「……」

「目を逸らさないで欲しいんだよ！」

うん、これは完全に私が悪いな。でも仕方なかったんだよ目次ちゃん。昨日はあーくんとご飯食べる事で頭がいっぱいだったし他の事なんて考える暇なかったんだから

「じゃあ…買い物行くから…家で待ってて…」

「許す！昨日の事なんか許して上げるんだよ！神に仕える者としてその罪を許します！」

何か食べ物を貰えると思った瞬間許してくれた…

この子変な人について行かないといいけど…

そんな事を考えていると何やら周囲の様子がおかしい気がする。

この時間なのに人がいない そんな事あり得るの

「この状況でも取り乱さないとはい中々やりますね」

内心焦っていたのは内緒だ。

とりあえずその声のする方を見ると痴女がいた

「…痴女って…実在したんだ…」

「な！／＼／＼この格好は仕方なくしてるだけです！それに私は痴女じゃありません！私はまだ処zy…」

墓穴を掘った事に気付きカアアアと頬を赤く染める痴女

「えええい！私は神裂火織です。あなたが保護してる禁書目録を渡して頂けないでしょうか」

先程の痴態を振り払うかのように真面目な顔をして話してきた。

この人は強い。素人の私にだってわかる。昨日の自称嘔ませ中2病魔術師とは違う。本気を出されたら私じゃ勝てない…なんで今日に限ってあーくんはいないんだろつか…それでも…

「それは・・・出来ない。」

そう。おとなしく渡せるわけがない。目の前にいる痴女が魔術師だという事はまず間違いないだろう。彼女達には彼女達なりに目次ちゃんを狙う理由があるのかもしれない。だとしてもそれを力ずくで連れて行くこととしてる連中に、はいどうぞ。なんて出来るわけがないのだ

「そうですか・・・なら仕方ありませんね・・・」

痴女が身の丈ほどの日本刀に手をかけたと思ったらその瞬間斬撃が飛んできた

「く・・・」

とっさに影でガードしたが斬撃が飛ぶなんてあり得るの？何あれ魔術ってやつ？早過ぎて抜刀したところが殆ど見えなかつただけど・・・

「よく躲しましたね。ですがいつまでもつでしようか？」

そう言って更に攻撃を仕掛けてくる

くそ・・・痴女の癖に・・・

「今何か失礼な事を考えませんでしたか？」

「・・・」

「目を逸らしてんじゃねーよド素人があ！」

読心術まで心得ていたとは……ますます私には荷が重い相手だ……

「まあよくもった方でしょう。さあおとなしく禁書目録を渡して下さい」

痴女の前にはその白く綺麗な全身を血で染めた舞雪が倒れている
意識を途絶えさせない、しかし反撃は出来ない程度に痛ぶることが
出来るほど彼女達の力は離れている

体中が痛い。これ全部私の血なのかな？最初に思った通りこの痴
女は強かった。多分本気ですらなかっただろう。痴女にも勝てず目
次ちゃんも奪われる……これじゃあーくんに笑われちゃうよ……

舞雪の頬に一筋の涙が零れ落ちる

「おいお前何してくれてんですか？まあどんな理由があったとしてもスクラップは決定だけどなババァ！」

「あーくん……」

あーくんが目の前にいる。これは夢なんだろうか。いや夢でも構
わない。最後にあーくんに会えただけで私は満足なんだ。

幸せそうに笑みを浮かべて舞雪は意識を失った